



いしはら・ひでかず／1935年、岐阜県美濃市生まれ。
伝統工芸士。15歳から本格的に和紙の作り手となる。

桁^{けた}を持った瞬間から
自分の神経が道具に
行き渡らないと
いい紙は漉^すけない。

和紙職人 いしはら ひでかず 石原英和 岐阜県美濃市

紙を漉^すいて、紙に好かれて、
暮らす日々。
豊かな森と水から
つむぎだされる和の心。



第一回
『美濃を見て死ね！』



TOIRO
編集部員

サトモの
ひたすら
職人ロード！

白を求めて、いざ美濃へ

「みの」

ひらがなで書かれるととっさに「もんだ！」と思い浮かぶ人はけっこう多いのではないかと。いえいえ、今回は漢字に変換してみます。

「美濃」

なんだかきれいな響きでしょう。きれいなのは名前だけではありません。山だ！ 川だ！ 空だ！ みんな大きくて、いいところです。

岐阜県美濃市。鵜飼で有名な長良川の支流、板取川流域は美濃和紙の産地として全国に知られている。その昔、正倉院所蔵の戸籍用紙は美濃の和紙であったというから歴史はざっと一三〇〇年。そんな美濃和紙を作っている職人さんを迷惑にも訪ねてきました。

時代を超えた純愛のカタチ

職人さん。無口で強面の頑固一徹。頭にやハチマキ。「紙のことわかねえやつとは話したくねえんだ、さあ帰った帰った！」と、どこで刷り込まれたのかわからない安直なイメージが先行。まあ、なにか境界線を引かれているような近寄りがたいものがあるのだ。

さて、カラカラと引き戸をひいて出てきたのは、美濃和紙のことはわ



漉いた和紙を天日干しする。和紙の水分は美濃の空へ舞い上がり、やがて雨となり、新たな和紙のための水となる。

写真提供：美濃和紙の里会館



漉いた紙を压榨後、干し板に貼り乾燥させる。



メイン工程の紙漉き。



和紙の白さを左右するちりとり。



水にさらした^{こうす}楮を煮熟する。

しに聞けとばかり、イメージ通りのお顔の石原英和さん。和紙職人歴五〇年をゆうに超えるベテランだ。美濃には製紙業を営む家が多く、石原家もそのうちのひとつだった。

「昔から紙が家業だったから、ここに生まれたからには紙をやるんだなと」

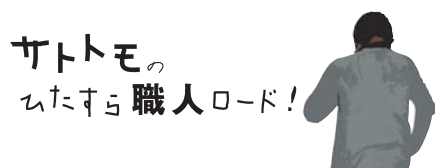
だが敷かれた道がまっすぐとは限らない。製紙の仕事を辞めたいと思って、東京へ出たこともあった。

「東京へ行つてやったことといつても、今までやっていたから手っ取り早いからって紙関係の仕事だったし。結局すぐ帰ってきた。だから紙から離れたことがないわけよ。紙が好きじゃなくても、紙がぼくを好きなんじゃないかと思ってる。そんなことでずるずると半世紀来ちゃったね」

戦後、美濃にも工業化の波が押し寄せた。和紙の漉き手もこの地域だけで五〇〇〇戸あったのが今では二〇戸に減ってしまった。多少グレて東京へ足に向けた時期もありながらもずっと和紙職人を続けてこられたのは周りの人の力だった。

「今までお得意さんもいたからそんなに仕事上で困ったことはなかったね。続けたんじゃなくて、続けさせてもらったんだ」

続けることはかなりの労力を使うだろうし、難しいことだ。あなたがいるから……と五〇年も続けてしま



サトモの
ひたすら職人ロード！



鶴飼で有名な長良川。取材時は12月。安定しない天候はこの時期特有のもの。「雪荒れ七日」と、雪が降ると1週間はずっと晴れた天気は来ないという言い種がある。その日も晴れていたと思ったら雨が降り出し、ふと気づいたらやんでいた。

ヤトモの ひたすら職人ロード！



版画家・瀧秀水たきしゅうすいの作品。女性の肌の部分は和紙そのものの色。浮世絵によく似合う。

うのはプロ根性ってやつなのかもしれない。ずるずるっと。

ちりとりコミュニケーション

和紙をつくるにはいくつかの工程がある。大まかにいうとまず、楮こうぞ、三桮みつまい、雁皮がんびなどの原料を水にさらし、釜で三、四時間煮てやわらかくする。次に原料に残っているゴミを丁寧の手作業で一本一本取り除く「ちりとり」という作業をする。ゴミを取ったあとの原料を木槌で叩いてのばしてほぐす。そのあとでやつと紙漉きをして紙のかたちになる。水分を切り、干し板に紙を貼り付けて乾燥させる。最後に厚さなどを見て分類選別をして用途に合ったサイズに裁断、とつくっていく。

仕事場を見せてくれるというのでひよこひよこついていくと、この日は「ちりとり」をやっていた。うーん、紙漉きが見たかった（と心の中でつぶやいたのだ）。

すると石原さんが「ちりとりは単純な作業だけど、これをしっかりやらないといい紙はつくれないよ」と。胸のうちがバレてる？ 失礼なことを思ってしまったかもしれません。しよせんメインにしか目が行かない素人まるだしのおれが情けないです。それにしても原料の楮が白くない。かんぴょうみたいな色をしていて、とてもあの白い紙になるとは思えない

かった。でも白くなるのだ。冷たい水にさらされて人の手により、洗練され、あか抜けるのだ。かんぴょうみたいな私もひとつ、ちりとりをやってもらえれば少しはあか抜けるかも。ぜひ職人さんの力をお借りしたいものである。

そのちりとり作業をやっている人がもう一人。石原さんの奥さんだ。「怖そうなおじさんだなあ」と思ってたんだって」

「あら、見た目より優しいんだよ。強そうに見えて優しいのよ」

「白が雑誌のテーマでここに来たんだって」

「私じゃあねえ……」

「モデルが悪かったかな」

このあと、取材されている理由や話した内容を学校から帰ってきた小学生が母親に話して聞かせるように、石原さんは奥さんに説明している。こんなに仲良しな二人がいる空間に私がいて、完全に放っておかれている。いたたまれないもんだ。仲良きことはよきかな。一通り話し終わると、やつと私の存在を思い出してくれたようだ。

和紙と日本創世

石原さんは人がいい。ずぶの素人に「これはね」と一から丁寧に説明してくれる。「本当は今日は紙漉きの日じゃないんだけど、特別だよ」

と。すばらしくわかってらっしゃる。紙漉き場は別の棟にあるため移動する。ちりとり仕事場を離れるとき、奥さんに「そこ、閉めといてね」といわれて「うん、閉めるよ」と返す。一見なんてことのないやりとりなんだけれど、冷え切った夫婦にありがちな「ダンナが返事をしてくれないんです（主婦四六歳）」なんてのはなくて、奥さんの小さな言葉にも必ず反応する。

移動途中、奥さんとの仲の良さを半ばなぜか嫉妬しつつも聞いてみた。「夫婦仲良くないといい紙はできないだよ。仲悪かったらできない」お、若干のろけか？ でもケンカぐらいしただろう。

「ケンカしながらやると出来ないのよ。私たち仲良いもので、ケンカしながらつくった紙はないの」

うーん、この二人の間には紙一枚入るすき間もないのか。

紙漉き場にやってきた。これを見たかったのです。見世物ではないのだけれど、素人の心をぐっとわしづかみ。ん？ なにかゴソゴソやっているな。作業衣姿だ！ いつも来ているのかと思いきや、

「普段は洋服なんだけど。作業衣はどこのイベントでやるときだけ着るの、こうすると職人らしく見えるからさ。何事も見た目は大事よ。着てるだけで『あ、職人さんだ』ってなるでしょ。見た目でごまかす（笑）」



昔ながらの町並みが残る美濃。うだつの上がる造り酒屋、小坂酒造場。小坂家住宅として国の重要文化財に指定されている。

え、そうだったのか……。職人とい

うと、でんと作務衣を常に着ているイメージだったが、石原さんはラフで、でも伝統を受け継いでいても現代の人であるわけで。けっして

近寄りがたい存在ではないのだ。

そんな話をしつつも石原さんの手は動き続ける。水と叩いてほぐした楮の入った、由美かおるがひとつ風呂浴びてそうな紙漉き台の中に「トロアオイ」という植物の根のねつとりとした粘液を入れてよくかきまぜる。トロアオイは漉いた紙を重ねたときにくっつかないように、また、紙漉きの際に水がすぐに下に落ちないようにするためのものだ。

トロアオイが全体に行き渡るようにに棒で手際よくかき混ぜているその姿が、日本書紀にでてくる神様のように入れた。もしかしたらイザナギとイザナミも日本をつくる時に、トロアオイを入れていたのかもしれないな。

「矛で海水をかきまぜて引き上げ、その矛の先からしたった水滴が海に落ち、最初の島になった……」

BGMは水の音

紙漉きは音だけでも楽しめる。水の流れる音が軽快で心地よい。「日本の音風景百選」に応募したくなる。美濃では「流し漉き」と呼ばれる製紙法で紙を漉く。繊維が絡まって、

より強く丈夫な和紙になる。「簀^{すけ}桁^た」

という漉き道具で、原料の入っている由美かおる風呂から水をすくい入れ、まんべんなく行き渡るように縦に横に桁を揺さぶる。石原さんの顔つきはさっきまでの冗談がうそのように「きつ」としている。何もしやべらない。集中。

「紙を漉いているときは何も考えていませんよ。変なこと考えてたらダメ、漉いているときの写真は全部目つきが厳しくなってるはず。桁を持った瞬間から自分の神経が道具に行き渡らないといい紙は漉けないと思うね。当たり前ですよ、職人はみんな。習字がわかりやすいね、上手な人は筆の先まで神経を集中させて微妙なラインをつくるでしょ。職人は誰でもそうなの。自分の体じやない「道具」を持ったら、道具の隅々まで神経を行き渡らせないと。やっぱりいいものができるいね」

紙漉きは、手塩にかけて白くした原料を紙という形にする大切な儀式。思い入れを込める工程だからこそ「無^む」なのだ。

何も足さない、何も引かない

紙漉きは、使用用途によって漉き方を変えるのだが、薄さ厚さの加減は目と手と五〇年の経験なのだろうと秘訣を聞くと、「こんなのは半年あれば誰だってできますよ」と。実

際、素人の私が「美濃和紙の里会館」で紙漉き体験をやってみた。た

しかにまったくの素人でも紙を漉くことはできる。けど顔つきは「きつ」とはならないし、変なこと考える。

石原さんはできるだけ客の注文に応えた和紙をつくっている。一〇〇円で注文を受けたら一〇〇円ですくするし、一万円なら一万円のものをつくる。パルプを混ぜてといわれたら、それも引き受ける。伝統も大事だが客のニーズにに応じていくことを第一としている。やはり石原さんの紙でないという固定客がいる。この紙しか使わない版画家もいるのだ。

「東京に出て都会の暮らしってやつをしたけど、われわれカントリーボーイには田舎のよさが身に染みついちゃってるのかな」

石原さんの暮らし美濃には川もあるし、山もあるし、情も厚い。都会では人工と自然は対立しているけど、ここで暮らしていると、人はしょせん自然の一部に過ぎないのだと思いが知られる。和紙だっておなじ。人の手で作られた人工のものだけれど、自然なものに見える。人が自然の存在なら、人が作ったものも自然。それが当たり前。和紙職人も自然の一部なのです。

紙を漉いて、紙に好かれて、暮らす日々。石原さんの和紙は今日もたっぷりの愛情につつまれて生まれてくる。

【取材後記】

美濃の取材を終えた帰り道、のんびりしすぎて新幹線への乗り継ぎ電車に乗り遅れそうになりました。あわててホームから飛び乗った電車は逆方向へ。真っ青な顔で乗務員さんにどうしましょう……と説明したところでどうにかできるはずもなく次の駅で下車。しかし、そこは田舎の無人駅。日も暮れて誰もいないホームで1時間に1本しか来ない電車を待つわけにもいかず、半泣きで公衆電話のタウンページにすがりつきタクシーを呼びました。乗り込むなり、新幹線がっ！ と必死にうったえると、運転手さんが飛ばしてくれて何とかセーフ。美濃のみなさん、ありがとうございました。また来ます。

今回の取材費用：2万5260円（タクシー代含む）



サトモの職人ロード！
みたす